

【造られた森、明治神宮の森に学ぶ】

千葉県森林インストラクター会

栗田 吉治

国際都市 TOKYO、この街の中に鬱蒼とした巨大な森がある。一步この森に入ると、都会の喧騒を忘れさせる静寂な神苑、玉砂利を踏む音が快い。この森、明治神宮の森は、およそ 90 年前「永遠の杜」を目指した壮大な計画のもと、人の手により造られた人工の森である。

1. 明治神宮の森が作られる以前



現在の明治神宮のある地は、はじめ徳川家康が江戸に入って間もなく加藤清正に与えられたもの、清正亡きのち、加藤家は取りつぶされ井伊家へ下賜され、井伊家下屋敷となっていた。明治になり一帯は皇室の御料地となったが加藤家、井伊家の下屋敷の庭園であった現在の御苑一帯を除いては、わずかな松林と雑木林があるものの草原や畑がほとんどで、荒地のような景観が続いていたといわれる。(写真は造営前の社殿予定地)

2. 明治神宮の誕生

明治 45 年(1912 年)の明治天皇の崩御ののち、その墓所を“東京に”との要望があったが、既に墓所は京都・伏見の土地に決定していた。“それならば神霊をお祀りしてご聖徳をしのぶ神宮の造営を”との声があがり、大正二年(1913 年)に明治神宮の創建が決まり、その後大正三年(1914 年)に昭憲皇太后も逝去され、合わせてお祀りすることとなった。その後、数ある候補地から、皇室との縁故も深く、すでに御料地であった現在の場所が選ばれ、隣接する代々木の陸軍練兵場の土地を一部、譲り受けて、合計 72.2 ヘクタールの土地が確保された。

3. 明治神宮の林苑づくり

1) 基本的な植栽方針

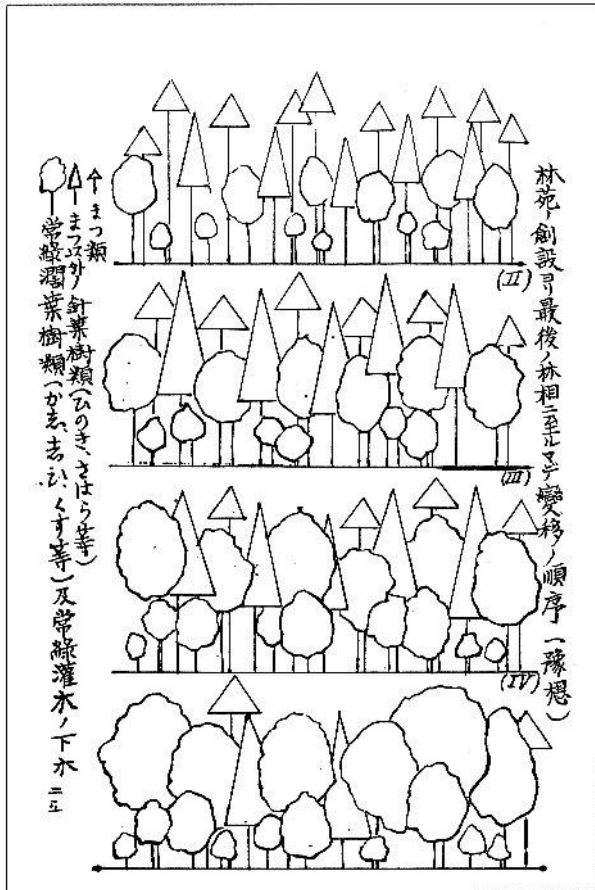
古代の神社は、社殿という建造物はなく、動物や植物を神霊とし、森そのものを神社と考えていた。万葉集には「神社」を「モリ」と読ませ、社と杜とは同義語であり、万葉集時代には、神社はすなわち森(杜)であったという。こうして日本独特の神社林は森厳・荘厳な雰囲気を持つものとされ、明治神宮の林苑に求められたのも、こうした森であった。そして植栽計画の基準として、次の 3 項目を軸として検討がなされた。

- 東京付近の気候風土に適し、周囲からの危害に耐え、永く健全な育成をし得るもの
- 林苑構成後は、なるべく人の手によって植栽や伐採は行わず、永遠にその林相を維持できるもの
- 林相は森厳で、神社林としてふさわしいものであること

その結果、一部に針葉樹を強く推す意見もあったが、針葉樹より煤煙に対する耐性があり、神社林として森厳な雰囲気を作ることができ、しかもこの神宮の敷地が森林帯上の暖帯に属し、人の手を加えずに永く森林を維持できる等の理由から、カシ、シイ、クスノキなど常緑広葉樹を主林木とする全体の植栽計画の基準が定まった。

2) 林相の変化を予想する植栽計画

植栽計画は、いきなり全域を常緑広葉樹に造林するのではなく、先ず、御料地時代からのアカマツ、クロマツなど先駆樹種の樹木を生かし、全国から集められた多種多様な献木の配置と新たな植栽によっ



予測された林相の変化。マツ類からヒノキ・サワラなどの針葉樹類、さらにカシ・シイ・クスなどの常緑広葉樹類が支配木になると見込まれた

て、造園期間満了となった時点で、神社の林苑としてふさわしく、さらに年を追うごとに理想の林相に近づくような植栽計画が立てられ実際の植栽に着手した。

第一次の林相：一時的な仮設の森、上冠木の主木としてアカマツ、クロマツ、それよりやや低い層に成長の早いヒノキ、サワラ、モミ、スギなどの針葉樹を交え、さらに低い層に将来の主林木となるカシ、シイ、クスノキなど常緑広葉樹を配し、最下層に灌木類を植栽する(左図一番上)。

第二次の林相：マツ類は、やがてヒノキ、サワラなどの旺盛な成育に押され、次第に衰退し、数十年後には、これらがマツ類に代わって林冠を支配する。またカシ、シイ、クスノキなどの常緑広葉樹がしだいに良好な生長をみせ、上木のヒノキ、サワラなどとその成長を競うようになる。

第三次の林相：100年内外でカシ、シイ、クスノキなどが支配木となり、常緑広葉樹が全域をおおい、スギ、ヒノキ、サワラ、モミ、わずかながらクロマツ、あるいは場所によってはケヤキ、イチヨウなどの老木を混生する森林となる。

第四次の林相：第三次からさらに数十年から100余年で、針葉樹は消滅し、純然たるカシ、シイ、クス類の鬱蒼たる老木林となる。この時はじめて、東京地方固有の天然林相が出現し、もはや人の手に頼ることなく、神社の森としてふさわしく、永々に荘厳神霊な林相が維持できるとした。

4. 明治神宮の森の特徴

明治神宮の地は、御苑など一部に谷底低地が存在するが、その大部分は武蔵野台地の一角を占め、適潤から湿潤地を好む樹種の生育には適さない場所である。もしここに自然状態の森が存在していたとしたら、ごく限られた少数の樹種で構成された森があったと思われる。当時は雑木林とススキ原となっており、そこからは、本来の自然植生である理想的な森林構造を知ることができず、主に温度条件から植栽可能な樹種を選択し、多様な樹種が全国から集められ、植栽された。

植栽された樹木は365種、12万2572本(献木が9万5559本、在来木で移植したもの1万5951本、他所からの移植8222本、新規購入2840本)、その後、立地条件に合わず衰退、枯死した種類も多く、今では246種類、約16万本といわれる。それでも異常に多様性の高い林分構成となっており、現在、相観的には自然林に近い森林に成長しているが、植物社会学的な構成種の内容からいえば、70ヘクタール程度の樹林としては極めて異常なものとなっている。

5. 明治神宮の森のこれから

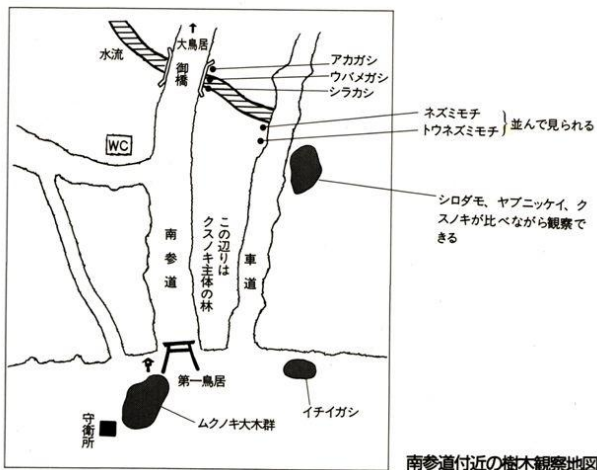
現在の林相は、マツクイムシの被害により、予想よりも早くマツ類が枯死したため、カシ、シイ、クス類がすでに林冠を支配しており、100年を待たずして第三次林相が出現している。また計画では天然下種による樹木の更新が進むものと予想されたが、現況では、コナラ、イチヨウなどの陽樹は、発芽後はぼ1年で枯死し、カシ、シイ、クスノキなどの陰樹も2~3年で枯死している。これは予想以上に林内が密になっていると考えられており、さらに、都市化の進行につれアオキ、シュロの異常繁殖が

見られ、樹木の天然更新を困難にしていると思われる。

林苑は計画されたものより早く成熟の時を迎えており、これから数十年程度の時代が、最も景観的に充実した林相を見せるものと思われる。しかしながら天然更新は計画したより進んでおらず、そのため林内の中層から下層を構成する更新稚樹、稚幼樹、亜高木と連続的な分布をみせる樹種は極めて少なくなっている。このままでは、将来、上層林冠を形成している樹種が衰退し、優良な稚幼樹が再び増加するまではアオキ、シュロ、アズマネザサなどの低木類の繁茂した林相の部分が多くなり、その後低木類が減少することで、高木性の更新樹が増加し、後継樹になるとと思われる。

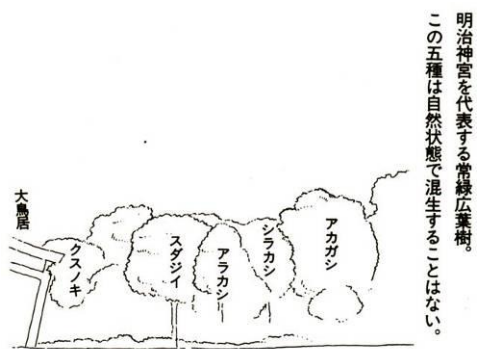
100年から数百年をかけて遷移・更新する天然林においては、林冠の疎開した老齢期と、後継樹が小さい建設期の時代が長く続いても問題は少ないが、神社林としての林苑では、常に正常な林相、すなわち森厳・荘厳ある林相を維持することが求められる。現在、根腐れ、落雷など自然淘汰により年間100本以上の大木が枯死しているため、天然更新は徐々に進むと思われ、またアオキ、シュロの除伐など最低限度の手助けを行えば樹木の天然更新は可能であると考えられる。いずれにしても、先人が目指した「永遠の杜」、天然更新による樹木の維持が理想と考えた壮大な実験の答えが出るまでには、森林の持つ時間的空間からみても、およそ90年の経過ではまだ短いと言えそうである。

6. 明治神宮の森ウォッチング（野外講座観察ルート順）



①南参道：広場に群植された3本のムクノキ、植えられた当時は腕の太さくらいの若木で前田侯の献植、制札に近いケヤキは鍋島侯、クスノキはある団体よりの献木であり、右手車道際のイチイガシの群植とともに、これらの献木は現在、天然木と見まがうばかりの成長を見せている。広場周辺はスタジイ、カシ類、クスノキなどにより大木林を形成しており、スタジイの何本かは白金火薬庫（現白金自然教育園）より移植されたもの。

②御橋(みはし)付近：以前は御料地と練兵場との境界で、低湿の荒地に新たに土工を施し景石を配して野趣ある溪流とし、森林中に目立たぬ庭園技法を加えた唯一の場所。設計当初は明るい雰囲気を出すため、ケヤキ、イチヨウなど落葉樹が混植されているが、常緑樹の成長につれて、初期の目的より暗い樹林になっている。また水流付近は、明るい感じを出すため、風致林的な植栽が考慮され、カエデ類、イヌシデ、エゴノキ、サカキなどが混植されている。上流側では配置した筑波石の背後にシラカシ、アカガシなどの常緑樹が生長し、低木のヒサカキ、サカキ、モチノキ、ヤブツバキ、亜高木にカエデ類が重なり合い深山の趣が巧に醸し出されている。神苑の中で、特に四季の変化が感じられる場所。



③大鳥居付近：大鳥居の前、南参道が接する三叉路の一角には、大鳥居寄りからクスノキ、スタジイ、アラカシ、シラカシ、アカガシの大木が寄り添って樹冠を形成している。常緑広葉樹であるこれらの樹木は、自然本来の生育できる気候的、地形的な条件が異なり、自然状態では決して同じ場所で生育することがない。それぞれの樹種の樹形、開葉時期、結実など同じ条件のもとで観察できる極めてまれな場所である。

④正参道：大鳥居から第三鳥居の間には、将来雄大に生育することであろうケヤキ、クスノキ、スタジイ

イなどを疎林状とし、下木を植栽せず孤立樹として風致的価値を高める心配りがなされた。現在、それらの樹木は意図どおり生育し大木となり、その姿を連ねているのが見られる。

⑤**社殿付近**：この付近は、当時アカマツの疎林地で、社殿との調和を図るため、クスノキ、シラカシ、スダジイ、サカキ、オガタマ、モチノキ、モクセイなどを植栽して玉垣内の景観がつけられた。社殿の後背地は、アカマツの林を間伐して、ヒノキ、サワラ、カシ、シイ、クスノキなどが植栽された。



⑥**北参道**：本殿から東脇参道をぬけ、北参道を左にとる辺りでは、ケヤキ、コナラ、ミズキなど在来木が保存されて残り、左側に造営当時一番の巨木であった「大椋」の二代目、その向い側に枯れた老樹より萌芽した数本のカツラがみられる。参道に沿った内奥の樹林はヒノキと常緑広葉樹の混交林となっているが、やや常緑広葉樹の生長が悪い傾向にあり、これはヒノキの植栽密度が濃かったためと考えられている。現在ヒノキの樹勢はやや衰えており、樹種の交代がどのように行われるのか興味のある場所となっている。

入口広場には、従来からあった雄・雌の大イチョウ、ムクノキ 1 本が現存し、また入口の右側に献木中最大のイヌマキ、現在の守衛所近くに前田侯より献植されたムクノキ 2 本を見ることができる。

⑦**北小路**：この北小路は本殿の裏側(北側)を通っており、本殿の北側はクス、カシなどの常緑樹を密植し、できるだけ早く神社林としてふさわしい鬱蒼とした森を造ろうとした意図がうかがえる。さらに北側の宝物殿側は、対照的に落葉広葉樹を中心にした明るい森になっている。ここではアオキがよく育っているが、カシ、クス類も下木として育っており、将来は落葉広葉樹にとって代わり上層木になり、この区域を支配すると思われる。

⑧**宝物殿付近の樹林**：宝物殿を中心とする一帯は、本殿を囲む森林区と、池や水の流れをつくる南側の低地で隔離されて、他の林苑部とは、まったく異なる景色となっている。広場は、北池に向かって緩やかに傾斜し、いくつかの丘状に地形が整理されている。芝地には、クロマツ、アカマツが点在し、所々にマテバシイ、アカガシ、ケヤキ、クヌギなどの群植・寄植を配置してある。

⑨**西苑路(旧道)**：西参道に並行する苑路(旧道)付近は、井伊家時代からのイヌシデ、サクラ、アカマツ、コナラなどがあつた所で、これらを保存しながらスダジイ、ムクノキ、クスノキなどを補植した。コナラ、イヌシデ、イイギリなどに当時の樹林の面影を見ることが出来る。

⑩**御苑**：御苑の樹林は、ほとんどが人の手が加わっておらず、上木は主としてコナラ、クヌギ、その他ヤマザクラ、ミズキ、ウワミズザクラ、ムクノキなどの落葉広葉樹が成育し、神宮の中で最大のムクノキもこの中にある。下層植生としては、シロダモ、モミ、カシ類、イロハモミジ、エゴノキ、ヒサカキ、サカキなど、また草本類も豊かである。ここは「武蔵野の雑木林」のおもかげを、現在に伝えているが、今後、数十年後にはカシ、モミ、シイ類などの常緑樹が主林木になると予想されている。

参考・引用資料：・「大都会に造られた森」第一プランニングセンター、「明治神宮の森の秘密」小学館文庫、明治神宮の森ホームページ他